

威厳と愛の思想家そして実践家 ヴィノット・ライナの死を悼む

武藤一羊

九月一二日、デリーで、ヴィノット・ライナが亡くなった。シヨックは大きい。働き盛りの六三歳であった。四年前から癌とたたかっていたが、ふだん通りの精力的な活動をつづけ、ごく少数の仲間以外、異常を気づかせなかった。

彼を知るアジアの多くの活動者にとつて、ヴィノットは、近しい、もつとも頼りになる、仲間、同志、友人であったと言っている。私是一九九〇年代にアジアの活動家知識人のネットワークであるARENNAを通じて彼と出会ったが、それは八四年のユニオン・カーバイド社がインドのボパールで起こした犯罪的



な爆発事故の被災者支援の活動家としてであった。しかし彼の活動範囲はもつと

広く、ナルマダダム開発反対の運動、ケララで始まった民衆の科学運動など、草の根の民衆運動に深くかかわり、たえず全国を飛び回る屈指の活動家であった。それとともに国境を越えて人びとのつながりをつくる活動に同じ熱意でかかわってきた。世界社会フォーラムの国際評議員でもあり、二〇〇四年のムンバイ世界社会フォーラムを準備する中心人物の一人でもあった。私は、一九九六年の南アジアでの「ピープルス・プラン21」などアジアや国際活動で活動を共にするなかで、彼が思想家として、理論家として、実践家として、教育者として並はずれた人物であることを実感するとともに、彼の比類ない行動へのパッションと温かい心にもますます引き付けられていった。彼は何度も来日し、各地の活動者と交流を深めた。来日のたびにピープルス・プラン研究所でも議論を交わした。彼のナルマダム反対運動の分析は、「ピープルス・プラン研究」（本誌の前身）の最初の号をかざった。

ヴィノットはデリー大学で学んだ理論物理学者、超エリートだった。しばらく母校で教鞭をとっていた。しかし四〇年前、インド中部の底辺の人びと、多くは先住民族の生活とたたかいに触れ、アカデミーを捨てた。そし

てマオイストの活動に参加し、二四時間をたかかきにささげる生活に入っていく。この時期に彼の見、経験したものがどのようなものだったか、その過酷さ、苛烈さを語ってもらう機会は失われた。だがその経験が、その後の彼の非暴力の社会活動の中心に存在し、彼の倫理的厳格さを裏付ける核として働いていたのではなかったか、と私は推測する。

彼の死はインドの主流メディアで大きく報じられた。もっぱら教育改革者の死としてである。彼は二〇一〇年に施行された「教育への権利法」の主要な起草者の一人だった。すべてのこどもに無償の義務教育を保証するとする憲法の規定を具体化する画期的な立法である。

ヴィノットは、草の根に結び付いた活動家であるとともに、全国政治における存在感のある大物であった。今更ながらそれに気づいた。しかし私（たち）が失ったのはやはり等身大のヴィノットである。民衆の運動への情熱とオプティミズムを多くの人びとに感染させてきたヴィノットである。それが病なら、希望の病、難治、感染性のそれであろう。

ありがとう、ヴィノット。

（むとういちやう／ピープルス・プラン研究所）